



たいしも通信

今回は防衛関係ニュース第12弾として、中国で行われた大イベントの続編をお送りします。前回は背景についてでしたが、今回は実際に披露された兵器そのものについてとなります。

◆軍事パレード全体について

9月3日に中国の北京で行なわれた「抗日戦争勝利80周年記念軍事パレード」では1万2千人の解放軍兵士及び最新兵器が披露され、習・プーチン・金からなる困ったちゃんトリオをはじめとする20人以上の国家元首等出席の大規模なものとなりました。日本からも妙な人が参加しているようですが、敢えて無視します。

肝心の最新兵器ですが、総括としてはドローン兵器(陸上・海上・海中含む)の数と進化の速度が異常なほど速く、様々なドローンが披露されました。次に目立ったのが各種ミサイルで、こちらはその方向性が少し変わってきたように思われます。

いずれにせよ中国は国威高揚や対外的プレゼンスも考えてか、とにかく何でもかんでもトレーラーに乗せて行進させます。絶対に公道を走れないような大型ミサイル、はてはちよつとしたクルーザーよりも大きな水上・水中ドローンまでパレードします。

◆ドローン兵器関連

ドローンと言うとまず飛翔体ですが、片手大のものから戦闘機よりも巨大なものまで登場しています。他方、民間イベント等で有名だった小型ドローン数百機によるドローン・スウォーム(集団の意)は、今回姿を見せませんでした。これは多数のドローンが機体間通信をしながら群れをなして自律飛行する集団飛行で、AIと高度なセンサー、ネットワーク能力を必要とする革新的技術です。それが今回登場しなかったのは、もうパレードで見せる必要がなく、当たり前のように実戦投入されると見られます。

また、飛翔体以外では、弾道ミサイル用よりもさらに長大なトレーラーに載った、無人海中機もパレードしています。

ドローンの有効性をよく理解している国ですから、当然その対抗策についても怠りなく、今回も対ドローン兵器が数多く登場し、ミサイル砲、レーザー兵器、マイクロ波等がありました。既存技術で実用化可能なマイクロ波は味方への影響もあり使用場面が限定されることから、まだ開発段階とはいえレーザーが注目されており、今回もレーザー砲塔を備えた車両がパレードしていました。

◆航空機関連

今回はパレードの最初と終わりに航空機編隊が飛行し、最新の戦闘爆撃機J-16を先頭に、複座型ステルス戦闘機J-20、空軍用と海軍空母への搭載用に開発されたステルス戦闘機J-35A、初登場となる米軍E-2Dそっくりさんの艦載早期警戒機KJ(空警)-600等が飛行しました。他方、最新の無尾翼戦闘機が出ておらず、秘密保持というより、開発の進捗があまり芳しくないのかもしれないかもしれません。

◆各種ミサイル関連

今回もDF(東風)-5Cや同61、JL(巨浪)-3といった大陸間弾道ミサイルが多数パレードに登場しましたが、米国等ではこれらよりもYJ(鷹擊)-15・17・19・20といった対艦超音速ミサイル群こそ厄介と評価しています。これらに加え、現時点で対応する米軍兵器が存在しないDF(東風)-26Dといった中型弾道ミサイル改造の対艦攻撃特化型の登場等、速度の異なるミサイルによる同時飽和攻撃による空母等艦艇への指向が注目されているのです。

◆編集後記

今回のパレードで中国が見せつけたのは、昨年までの最新兵器ショーではなく、実戦に直結する脅威だったと評されています。例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。